

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136  
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会  
企画事業部第 2 課長：金森幹仁  
<http://www.expo-cosmos.or.jp>  
090-6913-1445（7 月 31 日のみ）  
06-6915-4513

**2015 年（第 23 回）コスモス国際賞の受賞者は  
ストックホルム・レジリエンス・センター所長  
ヨハン・ロックストローム博士**

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：今井敬）は、7 月 31 日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：岸本忠三）、同選考専門委員会（委員長：武内和彦）からの報告を受け、ストックホルム・レジリエンス・センター所長のヨハン・ロックストローム博士（49 歳）を 2015 年（第 23 回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

ロックストローム博士は、人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達しており、この圧力が大きくなりすぎると、例えば気候、水環境、生態系などに内在するレジリエンスの限界を超えたときに不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、人類が生存できる範囲の限界＝プラネタリーバウンダリーを把握することで、人類にとっての壊滅的な変化が起こることを回避できるのではないか、そのような限界（臨界点：Tipping point）がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。プラネタリーバウンダリーの概念とその実証結果は、地球環境研究にかかわる多くの研究者に大きなインパクトを与えた。

また、持続可能な地球に関する研究の超学際的な連携・協働のための国際的な枠組みである Future Earth（フューチャー・アース）の構想などにも大きな影響を与えている。

以上の理由から、ロックストローム博士は、自然と人間との共生を理念とするコスモス国際賞の受賞者にふさわしいと評価できる。



PHOTO:M. Axelsson/Azote

写真画像ファイルは次のURLにあります。  
<http://www.expo-cosmos.or.jp/2015.jpg>

## 1. 選考の経緯

平成 27 年 5 月から 7 月までコスモス国際賞選考専門委員会を 3 回開催し、119 件を対象に審査した上、6 月 26 日開催のコスモス国際賞委員会で受賞候補者を決定した。

7 月 31 日開催の国際花と緑の博覧会記念協会理事会において、コスモス国際賞委員会からの報告を受け、受賞者を決定した。

### <2015 年コスモス国際賞の選考対象>

2013 年分 34 件、2014 年分 40 件、2015 年 45 件 合計 119 件 (23 カ国)

### <国別内訳>

日本(31)、アメリカ(27)、イギリス(12)、フランス(7)、オーストラリア(6)、カナダ(5)、ブラジル(5)、スウェーデン(5)、ドイツ(3)、トリニダード・ドバコ(2)、タイ(2)、チリ(2)、スイス(2)、インド(1)、ケニア(1)、マレーシア(1)、ベルギー(1)、スリランカ(1)、台湾(1)、ネパール(1)、インドネシア(1)、ロシア(1)、ノルウェー(1)

## 2. その他

### (1) 授賞式

平成 27 年 11 月 5 日 (木)、いずみホール (大阪市中央区) で行う。

### (2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞 (4,000 万円) を贈呈する。

## 添付資料

- ・ 受賞者の概要
- ・ 授賞理由
- ・ 受賞者のコメント
- ・ その他 (歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

## 受賞者の概要

氏名 ヨハン・ロックストローム

Johan Rockström

生年月日 1965年12月31日（49歳） スウェーデン・フィンスポング生まれ

国籍 スウェーデン

役職 ストックホルム・レジリエンス・センター所長

ストックホルム大学教授

### 学歴

1997年 ストックホルム大学博士号取得（自然資源管理）

1992年 スウェーデン農業科学大学修士

### 職歴

2008年－現在 : ストックホルム大学教授（環境科学）

2007年－現在 : ストックホルム・レジリエンス・センター所長

2004年－2012年 : ストックホルム環境研究所所長

2000年－2004年 : ユネスコ・IHE（水資源研究所）上級講師、研究コーディネーター

1998年－2000年 : スウェーデン国際開発協力庁、東アフリカ地域アドバイザー

### 主な受賞歴

2014年

The Woods Hole Research Center's Lawrence Huntington Environmental Prize

2013年

Agronomist of the Year, Agronomist Assoc. (Swedish Association of Professional Scientists)

2009年

Swedish Person of the Year by the journal Fokus, for bridging science and society

### アカデミー会員

2013年－現在 : スウェーデン王立科学アカデミー会員

主な論文

- Rockström, J.**, and Falkenmark, M., 2015. Increase Water Harvesting in Africa. *Nature*, 519: 283 - 285
- Steffen, W., Richardson, K., **Rockström, J.**, et al., 2015. Planetary Boundaries: Guiding Human Development on a Changing Planet. *Science*, 347 (6223): DOI: 10.1126/science.1259855
- Rockström, J.**, Brasseur, G., Hoskins, B., et al., 2014. Climate Change: The Necessary, The Possible and the Desirable – Earth League Climate Statement on the implications for climate policy of the 5<sup>th</sup> IPCC Assessment. *Earth's Future* 10.1002/2014EF000280
- Hughes, T.P., Carpenter, S., **Rockström, J.**, Scheffer, M., and Walker, B., 2013. Multiscale regime shifts and planetary boundaries. *Trends in Ecology & Evolution*, 28 (7): 389 - 395
- Gerst, M.D., Raskin, P.D., and **Rockström, J.**, 2014. Contours of a Resilient Global Future. *Sustainability*, 6 (1) : 123 - 135
- Gerten, D., Hoff, H., **Rockström, J.**, Jägermeyr, J., Kummu, M., Pastor, A.V., 2013. Towards a revised planetary boundary for consumptive freshwater use: role of environmental flow requirements. *Current Opinions in Environmental Sustainability*, 5 (6): 551 - 558
- Rockström, J.**, Falkenmark, M., Karlberg, L., and Lannerstad, M., 2012. The Planetary Water Drama. *Geophy. Res. Lett.* 39(15): 16 DOI: 10.1029/2012GL051688
- Griggs, D., Stafford-Smith, M., Gaffney, O., **Rockström, J.**, Öhman, M.C., Shyamsundar, P., Steffen, W.,
- Glaser, G., Kanie, N., and Noble, I., 2013. Sustainable development goals for people and planet. *Nature*, 495 (7441) : 305 - 307
- Anderies, J.M., Carpenter, S.R., Steffen, W., and **Rockström, J.**, 2013. The topology of non-linear global carbon dynamics: from tipping points to planetary boundaries. *Env. Res. Letters*, 8 (4), DOI: 10.1088/1748-9326/8/4/044048
- Foley, J.A., Ramankutty, N., Brauman, K.A., Cassidy, E.S., Gerber, J.S., Johnston, M., Mueller, N.D., O'Connell, C., Ray, D.K., West, P.C., Balzer, C., Bennett, E. M., Carpenter, S.R., Hill, J., Monfreda, J., Polasky, S., **Rockström, J.**, Sheehan, J., Siebert, S., Tilman, D., & Zaks, D.P.M., 2011. Solutions for a cultivated planet. *Nature*, 478 (7369), p.337-342, Oct 2011
- Reid, W. V., Chen, D., Goldfarb, L., Hackmann, H., Lee, Y.T., Mokhele, K., Ostrom, E., Raivio, K., **Rockström, J.**, Schellnhuber, H.J., Whyte, A., 2010. Earth System Science for Global Sustainability: Grand Challenges. *Science*, 330 (6006): 916-917
- Rockström, J.**, Steffen, W., Noone, K., Persson, Å., Chapin, III, F.S., et al. 2009. A Safe Operating Space for Humanity. *Nature*, 461: 472 – 475
- Rockström, J.**, Steffen, W., Noone, K., Persson, Å., Chapin, III, F.S., et al. 2009. Planetary boundaries: Exploring the safe operating space for humanity. *Ecology and Society*, 14 (2): 32

主な著書

- Rockström, J.**, and Klum, M., 2015. *Big World Small Planet. Abundance within Planetary Boundaries*, Yale University Press (released in August 2015)
- Rockström J.**, Falkenmark M., Folke C., Lannerstad M., Hoff H., Enfors E., Gordon L., Barron J., Heinke J., Pahl-Wostl C. 2014. *Water resilience for human prosperity*. Cambridge University Press
- Rockström, J.** and Klum, M., 2012. *The Human Quest: Prospering within Planetary Boundaries* (foreword by President Bill Clinton, Nobel Laureates Yuan Tse-Lee and Paul Crutzen, Langenskiöld Förlag).
- De Fraiture C., Wichelns D. (CLA), **Rockström J.** and Kemp-Benedict E. (lead authors), 2007. Looking Ahead to 2050: scenarios of alternative investment approaches. *Comprehensive Assessment of Water Management in Agriculture*, Vol 3. EarthScan.
- Rockström J.** (CLA), Hatibu N., Oweis T., Wani S. 2007. Managing water in rainfed agriculture. *Comprehensive Assessment of Water Management in Agriculture*, Vol 8. EarthScan.
- Falkenmark M., and **Rockström J.**, 2006. *Balancing Water for Man and Nature: The new approach to ecohydrology*. Chinese Edition. [www.waterpub.com.cn](http://www.waterpub.com.cn)
- Falkenmark M., and **Rockström J.**, 2004. *Balancing Water for Man and Nature: The new approach to ecohydrology*. EarthScan.

## 授賞理由

ロックストローム博士は、スウェーデン出身の気鋭の環境学者である。博士は、レジリエンス研究の世界的研究拠点であるストックホルム・レジリエンス・センターの所長(Executive Director, Stockholm Resilience Center)であり、同時にストックホルム大学で環境科学(とくに水資源と地球持続性)の教授を務めている。また博士は、2004~2012年まで、これも世界的によく知られたストックホルム環境研究所(Stockholm Environment Institute)の所長を務めていた。

ロックストローム博士は、グローバルな水資源と世界の水資源に乏しい地域(とくに開発途上国)におけるレジリエンス強化戦略の構築についての研究を先導する研究者として活躍してきた。地球環境変動、レジリエンスとサステナビリティ、農業水管理、流域水文学、グローバルな水資源と食料生産、生態水文学などに関して、100以上の研究業績(うち50以上の査読付き論文)、およびいくつもの著書を公表してきた。

ロックストローム博士の名が学术界を超えて広く世界中に知られるようになったのは、博士を筆頭著者とする世界の著名な29名の研究者による「プラネタリーバウンダリー」(Planetary boundaries)に関する研究成果が公表されてからである。博士らは、人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達しており、人類が地球に与える圧力が大きくなりすぎると、例えば気候、水環境、生態系などに内在するレジリエンスの限界を超えたときに不可逆的で大きな変化が起こりうるとした。人類が生存できる範囲の限界=プラネタリーバウンダリーを把握することで、人類にとっての壊滅的な変化が起こることを回避できるのではないか、そのような限界(臨界点: Tipping point)がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

この概念は2009年に論文として公表され、全文がEcology and Societyに、またその要約版がNatureに掲載された。前者の被引用件数は約3000、後者のそれは約2000となっている。

これらの論文は、9つのプラネタリーシステム(気候変動、海洋酸性化、成層圏オゾンの破壊、窒素とリンの循環、グローバルな淡水利用、土地利用変化、生物多様性の損失、大気エアロゾルの負荷、化学物質による汚染)のバウンダリーを評価したものである(最後の2項目はいまだ定量化が行われていない)。この結果をグラフに示したのが図1であるが、気候変動、窒素循環、生物多様性の損失がすでにバウンダリーを超えてしまっていることを示している。

プラネタリーバウンダリーの概念とその実証結果は、地球環境研究にかかわる多くの研究者に大きなインパクトを与えた。また、持続可能な地球に関する研究の超学際的な連携・協働のための国際的な枠組みであるFuture Earth(フューチャー・アース)の構想などにも大きな影響を与えている。

ロックストローム博士は、学際的な環境科学分野での国際的な研究実績を有するとともに、プラネタリーバウンダリー研究のとりまとめにみられるように、世界の著名な研究者を束ね、国際社会に強烈なインパクトを与える体系的な研究成果を社会に分かりやすくとりまとめる優れたコーディネーション能力と、TED(Technology Entertainment Design)の講演で見られるような高いプレゼンテーション能力を兼ね備えている。

以上の理由から、ロックストローム博士は、自然と人間との共生を理念とするコスモス国際賞の受賞者にふさわしいと評価できる。

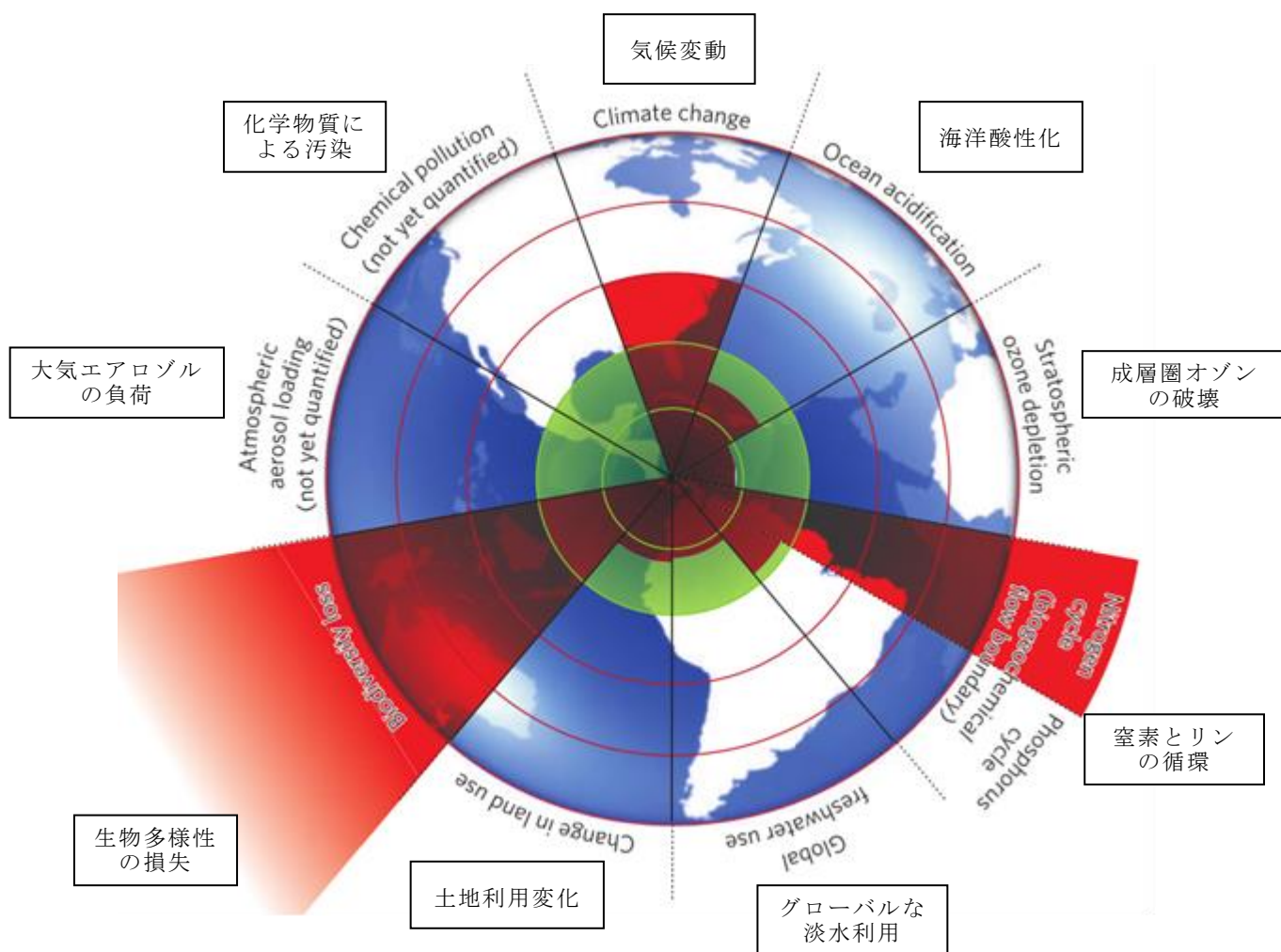


図1 バウンダリーを超えて(Rockström et al., 2009, Nature Vol. 461)  
 内側の緑の網が 9 つのプラネタリーシステムを安全に操作できる領域(the proposed safe operating space for nine planetary systems)。赤いくさびは、それぞれの変数の現在の状態を推定したもの。3つのシステム(生物多様性の損失、気候変動、人間の窒素循環への干渉)は、すでにバウンダリーを超えている。

## 受賞者のコメント

私たちは今、人類史上初めて科学的な厳密さをもって、人類が地球システム全体を崩壊させる力を持っていると言えます。同時に、回復力が高く安定した生物圏は、人類の生存基盤であるあらゆる生態系の機能やサービスを生み出していますが、このような生物圏がなければ、世界で人類の発展は望めないことを裏付ける圧倒的な証拠があります。私たちは前例のない地球環境のリスクに直面していることを自覚する最初の世代であると同時に、このリスクに対して何らかの対策を行うことのできる最後の世代ともなるでしょう。持続可能な地球の実現に向けた変化が必要です。しかし大変有望なことに、そのような変化を起こすことは可能であり、さらに最も重要なことですが、人類にとってより魅力的な未来の構築につながるという証拠も増えています。

私の科学研究の取り組みは、この危機的な局面において人類が置かれている苦境を理解する方法と、人類が持続可能な地球に向けた変化を起こす上での指針となる科学に基づいた枠組みの推進に焦点を当てています。この研究は本来、「自然と人間との共生」および「人間と地球との共生」への道筋を模索しようとするものです。ゆえに、このたび 2015 年度コスモス国際賞を受賞できたことを、大変光栄に存じます。この栄えある賞は、地球のレジリエンス（回復力）や地球持続性およびプラネタリーバウンダリー（地球の環境容量の限界）についての私たちの研究の重要性をさらに高めるものです。また、国際的な科学共同研究を評価していただいた結果の受賞であると思います。高い評価と尊敬を集めている科学者や、若く才気あふれる前途有望な科学者が集まり、全力を尽くして、この地球持続性学の統合的研究に貢献してくださいました。このたびの受賞は、そのような方々の貢献のおかげと感謝しております。特に、ストックホルム大学のストックホルム・レジリエンス・センターおよびプラネタリーバウンダリー研究所の科学者の皆さん、ならびにコペンハーゲン大学のキャサリン・リチャードソン教授、オーストラリア国立大学のウィル・ステフェン教授、ポツダム気候影響研究所のハンス・ヨアヒム・シェルンフーバー教授、そして主要な地球システム科学研究所によるアース・リーグのネットワークに深く感謝したいと思います。彼らの中核的な科学研究の協力がなければ、プラネタリーバウンダリー、すなわち人類が安全に活動できる領域内での世界の開発を目指すべく社会を変えていく必要性や価値について、今日のように理解を進めることはできなかったでしょう。

地球上で人類が安全に活動できる生物学的な領域を定義づけようとする試みであるプラネタリーバウンダリーのコンセプトは、地球システム科学のこれまで 30 年間にわたる著しい発展の結果、科学的に導き出された 3 つの鍵となる視点に立脚しています。

1 番目の視点は、人類が新しい地質時代「人新世」に入ったということです。人新世とは、私たち人類が地球に変化をもたらす最大の要因となっている時代のことです。事実、地球の生物物理学的な力に対し人間が与えている圧力は飽和状態にあり、人類の発展を支える地球システムの能力が上限に達している兆候が見え始めているのです。2 番目は、地球システムには限界



点（閾値）があり、それを超えてしまうと地球上の生活環境に突然に不可逆的な変化が起きる臨界点に到達するという証拠がたくさん見ついているということです。そして3番目は、「完新世」と呼ばれる時代を地球の望ましい状態として特定したことです。完新世とは、これまで1万2千年以上にわたって地球が間氷期の温暖かつ極めて安定した状態にある時代であり、唯一、現代世界の発展を支えることができる時代です。これらの3つの視点—人類が人新世の時代を迎えたこと、地球の臨界点が予測されていること、そして完新世が地球の望ましい状態であること—の組み合わせが、プラネタリーバウンダリーのコンセプトの形成につながりました。

プラネタリーバウンダリーは、地球を完新世の状態にとどめておくために地球システムの能力を制御するプロセスを明らかにしています。また、最新の科学的知識に基づいて、それぞれの制御プロセスに関し、「安全な」バウンダリー—すなわち、その先に進むと臨界点を越えるリスクが急速に高まる境界線—を定量化しようとする試みです。これによって、地球上で人類が安全に活動できる領域を把握することができます。

プラネタリーバウンダリーのコンセプトは、地球持続性の構築をめざす統合的な地球システム研究をさらに推進するための科学界の取り組みに貢献してきました。また、政策立案者やビジネスリーダー、そして市民社会団体からも強く支持されてきました。国連のミレニアム開発目標（MDGs）に代わる2016年以降の新たな開発目標である持続可能な開発目標（SDGs）においても、地球環境に関する目標、すなわちプラネタリーバウンダリー内で達成すべき、尊厳ある豊かな人類の未来を築くための社会的・経済的な目標が設定されています。事業戦略にプラネタリーバウンダリーを組み込もうとするビジネスリーダーの関心も急速に高まっています。例えば、持続可能な開発に向けた大きな変革の必要性和恩恵を理解している有力なビジネスリーダーと思想的指導者の集団、「Bチーム」がこれに取り組んでいます。同様に、持続可能な開発のための世界経済人会議（WBCSD）は、持続可能な事業戦略とは何かを考える上で、プラネタリーバウンダリーの科学を採り入れています。

世界は、社会的な臨界点に近づいていると思われま。そこでのリスクに関する科学的解明が進んでいますが、持続可能な地球へ向けて世界中の人々が変化を起こせば、好機となるという証拠も増えており、全世界でその取り組みの機運が高まり始めています。2015年は、持続可能な開発目標（SDGs）と国連気候変動パリ会議（COP21）が世界の政治的議題に上る、持続可能な開発にとって重要な年です。この意義ある年に、私たちのプラネタリーバウンダリー研究に代表される地球持続性学の功績をお認めいただき、コスモス国際賞受賞の栄誉を賜りましたことは、この上ない励みとなり、さらに精進を重ねて参る所存です。

受賞の報に接し

ヨハン・ロックストローム

(参考資料)

## コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

### 1993年（第1回）受賞者

ギリアン・フランス卿

イギリス 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

### 1994年（第2回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）

フランス パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

### 1995年（第3回）受賞者

吉良龍夫博士（物故者）

日本 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

### 1996年（第4回）受賞者

ジョージ・ピールズ・シャラー博士

アメリカ 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

### 1997年（第5回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士

イギリス オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

### 1998年（第6回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士

アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

### 1999年（第7回）受賞者

呉征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）

中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

#### 2000年（第8回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿

イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

#### 2001年（第9回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授

アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

#### 2002年（第10回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所

エクアドル・ガラパゴス諸島

1964年設立の国際的NGO・NPO組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

#### 2003年（第11回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士

アメリカ ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

#### 2004年（第12回）受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授

メキシコ メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

#### 2005年（第13回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士

カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

#### 2006年（第14回）受賞者

ラマン・スクマール博士

インド インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

#### 2007年（第15回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士

イギリス ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

**2008年（第16回）受賞者**

**ファン・グエン・ホン博士**

**ベトナム ハノイ教育大学名誉教授**

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

**2009年（第17回）受賞者**

**グレッチェン・カーラ・デイリー博士**

**アメリカ スタンフォード大学教授**

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

**2010年（第18回）受賞者**

**エステラ・ベルグレ・レオポルド博士**

**アメリカ ワシントン大学名誉教授**

父アルド・レオポルド氏（1887-1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

**2011年（第19回）受賞者**

**海洋生物センサス科学推進委員会**

**事務局：アメリカ ワシントンDC**

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

**2012年（第20回）受賞者**

**エドワード・オズボーン・ウィルソン博士**

**アメリカ ハーバード大学名誉教授**

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

**2013年（第21回）受賞者**

**ロバート・トリート・ペイン博士**

**アメリカ ワシントン大学名誉教授**

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

**2014年（第22回）受賞者**

**フィリップ・デスコラ博士**

**フランス コレージュ・ド・フランス教授**

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アシュアールの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015.4(五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
委員長 Chairperson	岸本 忠三 Dr. Tadamitsu Kishimoto	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center , Osaka University
副委員長 Vice- Chairperson	尾池 和夫 Dr. Kazuo Oike	地震学 Seismology	京都造形芸術大学 学長 President, Kyoto University of Art And Design
委員 Member	浅島 誠 Dr. Makoto Asashima	発生生物学 Developmental biology	独立行政法人 日本学術振興会 理事 Director, Japan society for the promotion of science
委員 Member	磯貝 彰 Dr. Akira Isogai	農芸化学 Agricultural Chemistry	奈良先端科学技術大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, Nara Institute of Science and Technology
委員 Member	小山 修三 Dr. Shuzo Koyama	文化人類学 Anthropology	一般財団法人 千里文化財団 理事長 President, The Senri Foundation
委員 Member	佐々木 恵彦 Dr. Satohiko Sasaki	森林資源科学 Forest science and resource	公益財団法人 国際緑化推進センター理事長 President, Japan International Forestry Promotion and Cooperation Center
委員 Member	武内 和彦 Dr. Kazuhiko Takeuchi	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学サステイナビリティ学連携研究機構長・教授 Director and Professor, Integrated Research System for Sustainability Science (IR3S), University of Tokyo
委員 Member	西澤 直子 Dr. Naoko Nishizawa	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学生物資源工学研究所 教授 Professor, Research Institute for Bioresources and Biotechnology, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. Yoshihiro Hayashi	動物資源科学 Animal science and resource	独立行政法人 国立科学博物館 館長 Director General, National Museum of Nature and Science

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
顧問 Advisor	有馬 朗人 Dr. Akito Arima	原子核物理学 Nuclear physics	学校法人根津育英会 武蔵学園 学園長 Chancellor, Musashi Academy of the Nezu Foundation
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr.Keiko Nakamura	生命科学 生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館 館長 Director General, Biohistory Research Hall

2015.4 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	武内 和彦 Dr. Kazuhiko Takeuchi	緑地環境科学 Landscape and Environmental Science	東京大学サステイナビリティ学連携研究機構長・教授 Director and Professor, Integrated Research System for Sustainability Science (IR3S), University of Tokyo
副委員長 Vice- Chairperson	今福 道夫 Dr. Michio Imafuku	動物行動学 Ethology	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	秋道 智彌 Dr. Tomoya Akimichi	生態人類学 Ecological Anthropology, Ethno-Biology	総合地球環境学研究所 名誉教授 Professor Emeritus, Research Institute for Humanity and Nature
委員 Member	池内 了 Dr. Satoru Ikeuchi	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member	モンテ ・カセム Dr. Monte Cassim	環境科学 Environmental Science	立命館大学 名誉教授 Professor Emeritus, Ritsumeikan University
委員 Member	ケビン ・ショート Dr. Kevin Short	文化人類学 Anthropology	東京情報大学環境情報学科 教授 Professor, Department of Environmental Information, Tokyo University of Information Sciences
委員 Member	野家 啓一 Mr. Keiichi Noe	科学哲学 Philosophy of Science	東北大学教養教育院 総長特命教授 President-appointed Extraordinary Professor, Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University
委員 Member	村上 哲明 Dr. Noriaki Murakami	植物分類学 Systematic Botany	首都大学東京大学院理工学研究科 教授 Professor, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Metropolitan University
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. Izumi Washitani	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation Ecology	中央大学理工学部 教授 Professor, Faculty of Science and Engineering, Chuo University